

郷土館だより

Vol. 19. No.3

1997. 3. 15



春を迎えるムラの祭り「初午」

玉沢は箱根西麓の懷に抱かれるようにたたずむ静かなムラ。村域には経王山妙法華寺という日蓮宗の大寺院があります。ムラと寺は昔から一体の関係にあったと言えるでしょう。すなわち、寺がこの地に開山する時、ムラもいっしょに移転してきた歴史があるからです。そんなムラにおける、人々の暮らしの中には、さまざまな場面で妙法華寺とのつながりの深さを感じさせる行事などが見られます。

二月の最初の午の日は初午と呼ばれ、ムラの年中行事となっています。経王山妙法華寺の寺域口(山門)には稲荷社が運ばれます。普段は別な場所に祀られている社ですが、この日ばかりは山門のところがお祭り場所となるからです。早朝から山門前の社にはムラの人々が銘々ノボリバタを持って来て立っています。やがてお坊さんも来て、供えものやノボリバタで飾り付けられた稲荷社に経をあげ、人々は参拝。社は午前中いっぱい元通りに片づ

けられます。供え物には、油揚げ、生魚一対、酒、ワラツト(藁づと)に盛ったオコワなど。また祭壇前には狐の置物が一対。狐は神の使者だと言われます。

初午は春を迎える祭りとして解されて国内広域でお祭り事例が見られます。一説には「冬到来とともに山に登った田の神が初午の日に里に下る」ということが言われ、この日を境に里の仕事が始まるのだそうです。三島周辺での初午は、屋敷内に祀られている稲荷社に、供物をあげ、「正一位稲荷大明神、家内安全」などと書いた色紙のノボリバタを立てることが習わしとなっています。また、近所には、子供たちがノボリバタを何本も書いて稲荷社のある家に立てて回ることも行われます。

「稲荷さんは屋敷神」という解釈が一般的なようです。里のあっちこちに色とりどりのノボリバタが風にはためくようになると、ほんとうに春めいてきます。

企画展

「農兵節と平井源太郎」

3月16日(日)～5月11日(日)

三島は昭和初期に、「富士の白雪ノーエ…」で始まる民謡「農兵節」の大流行によってその名を全国に知られるようになりました。

この農兵節大流行のきっかけを作ったのが平井源太郎（明治15年－昭和15年）でした。源太郎は箱根大根を宣伝するために、東京や関西で農兵節と農兵踊りを披露するという独特の宣伝を行い、また昭和9年に農兵節を赤坂小梅の唄でレコード化して大ヒットさせました。大根の販路拡大に貢献した源太郎は箱

根坂地域の農民達の恩人と仰がれています。

すっかり三島の風物詩となっている農兵節ですが、今回の企画展では、幕末に発生したといわれる「農兵節（ノーエ節）」のさまざまなルーツを探ります。

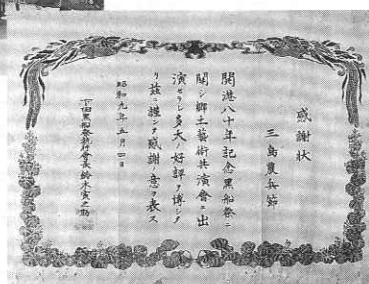
同時に、マチおこしの先駆であった平井源太郎の業績を検証し、戦後源太郎の遺志を継ぎ農兵節の普及に努めた人々の活躍も紹介します。



平井源太郎は、選挙の浄化を訴え、看板も自らの筆で作製している



下田黒船祭に参加した三島農兵節の一行（昭和9年）、右は出演に対する感謝状



平井源太郎の生涯

昭和初期に農兵節の宣伝に半生をかけた平井源太郎は、明治15年（1882）に、現在の中央町で酒屋「大宮源^{おおみやげん}」を営んでいた平井源助の長男として生まれました。

大正時代には三島の野戦重砲兵連隊にたくあん漬を納めるなど手広く商売をしていました。しかし、大正末～昭和の初め頃、伝染病流行の影響で軍隊との取引が止められ、店を閉じることになります。

この後源太郎は家業を捨て、街頭に立ち、生産農家と庶民のための「商道改革」を訴え始めました。今でいう流通革命を唱え、町議、県議へ立候補しますが、三島町民には受け入れられず、落選を重ねた末、昭和12年町議となりました。

一方、矢田孝之と共に、三島民謡として「農兵節」を売り出しました。昭和9年には、コロムビアレコードから赤坂小梅の唄で発売し、「農兵節」は全国的に知れ渡っていきます。

この宣伝の方法が独特で、幕末に三島で行われた農兵訓練の故事を基に、葦山笠・陣羽織姿で大・小刀を腰にさし、大阪や東京をかつ歩し、人目を引きました。

また、箱根大根の宣伝も農兵踊りといっしょに行い、特に大阪市場の開拓に貢献しています。三島のマチおこしに奮闘した人生でした。源太郎は昭和15年58歳で亡くなり、墓は川原ヶ谷願成寺にあります。



昭和15年12月3日、農兵節をラジオ放送した時のもの、右端が矢田孝之、右から3人目が源太郎

農兵節の宣伝

昭和の初め、平井源太郎は矢田孝之と共に当時三島の花街で流行していた「ノーエ節」を洗練し、幕末の農兵調練にかけて三島民謡「農兵節」として宣伝し始めました。

特に源太郎は農兵の指揮官の葦山笠・陣羽織・たっつけ袴の装束で、東京や大阪へ赴き、人目を引きました。また、農兵踊りも源太郎の考案で完成します。

農兵節の宣伝が最高潮となったのは、昭和9年のレコード吹き込みの頃です。2月にコロムビアレコードから赤坂小梅の唄で発売されヒットしました。次いで5月には、出資者



箱根大根の宣伝用写真、モデルは三島の芸者さん、富士山は後で描き込まれている。

の矢田孝之自身が「箱根の山からノーエ…」で始まる（元）農兵節を三島の芸者十郎と共に吹き込みます。

また、源太郎は、当時大量に生産され始めた良質の箱根大根も、農兵節といっしょに宣伝を始めました。若者による農兵踊りの後、箱根大根のピラをまくというものでした。農兵節と大根の宣伝風景は三島の風物詩となり東京や関西では驚きの目で見られていたようです。

レコードやラジオの普及もあり、昭和10年頃には、農兵節はすっかり全国的に知れ渡るようになりました。



昭和9年5月に吹き込まれた農兵節レコード（唄十郎〈裏面は矢田孝之〉、新太陽レコード）

農兵節(ノーエ節)のルーツ

三島で広まった農兵節（ノーエ節）のルーツについて、さまざまな説があります。

1、農兵調練の時に使用された行進曲

三島の古くからの言い伝えで、幕末、葦山代官江川太郎左衛門の農兵の洋式調練の時に長崎帰りの留学生が持ち帰った曲が採用され詞もつけて唄われ、全国に流行したというもの。農兵の調練の年代につじつまが合わない部分があり、どこまでが史実なのか不明。

2、横浜野毛山節伝來說

文久2年（1862）、横浜で作られた野毛山節（外国人居留地の光景を唄う）が、明治又は大正の頃三島に伝わり、「富士の白雪」と替えられ、農兵節となったというもの。

昭和30年代以後の民謡関係の本の多くはこの説をとっている。

野毛山節 横浜を代表する民謡で年に20数回行事に参加している。中央は野毛山節保存会会長片山浪氏。▶

3、大阪経由伝來說

明治の大阪で「天満橋からノーエ…」が流行し、大正時代には「大阪城からノーエ…」となった。その頃大阪師団の兵士が、三島へ入隊する後輩に伝えた、というもの。

4、原曲はオランダの行進曲か？

幕末、安政2年（1855）に長崎海軍伝習所が設けられ、オランダ人の教官により西洋式鼓笛楽も伝授されている。この中の曲に農兵節の原曲が含まれていて、葦山からの伝習生の他、全国へ広まった可能性がある。



戦後の農兵節の普及活動

昭和15年に平井源太郎が急逝した後、遺志を継いで農兵節の普及に努めたのは、矢田孝之や内田すえなど、いっしょに唄い踊った仲間でした。

矢田孝之（明治35年～昭和49年）は美声の持ち主で、自らもレコードに吹き込み、何回も民謡大会に出場して入賞しており、又ラジオ放送で唄うなど、曲の普及に熱心でした。

戦後になると、水口徳兵衛・川口登や七福の会などが新たに農兵節の宣伝を始めます。

川口（明治40年～昭和50年）は農兵節保存会を結成し、全国に宣伝に赴きました。昭和31年から39年までの活動記録が『出陣帳』として残されています。

これを見ると、近隣の催し物への出演の他、学校・婦人会・諸団体への農兵節の指導を行っています。又三嶋大社の夏祭り（8月15～17日）前には、数日かけて富士宮・伊東・御殿場方面へ、祭りの宣伝に回っています。夏祭りでは子供会や当番町他の農兵踊りでにぎわい、35年からはパレードとして200人ほどの農兵節市巾行進が行われています。

また、昭和30～40年代に3回レコードの吹き込みが行われました。当時は、全国的に宴会の締め曲が農兵節だったといわれます。このように多くの人々の活躍で、農兵節は広く浸透しました。

現在、商工会議所内に「農兵節普及会」（昭和34年結成）の事務局があり、普及活動に努めています。



昭和26年8月1日号 三島市広報
第2回水まつり（7月15・16日）で農兵踊りが踊られている。



昭和32年7月25日、願成寺の平井源太郎の供養会、農兵節保存会より花立てが贈られている。右から2人目が川口登。



昭和44年7月 農兵節普及会の一行



昭和35年4月9日、三島農兵節の普及と指導
左端は川口登

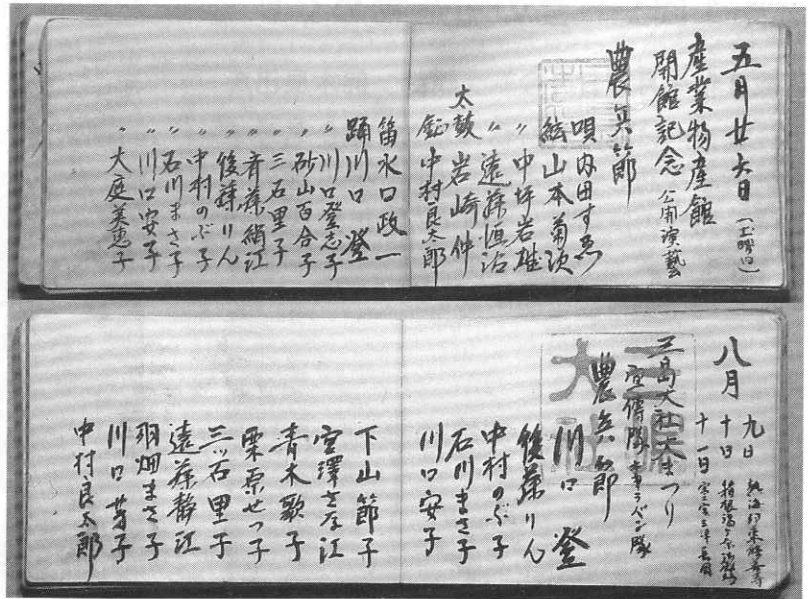


昭和39年の夏祭り農兵踊りのパレード
子供達も参加した



農兵節保存会『出陣帳』

昭和31年から昭和39年にかけて川口登が書き残した農兵節保存会及び農兵節普及会（昭和34年に、別々に活動していた矢田孝之・川口登の各派と花柳会がいっしょになり農兵節普及会となった）の活動記録、年間約50日前後、出演・指導等に出向いている。



昭和31年『出陣帳』より



戦後発売された農兵節レコード

昭和32年6月13日 日本ビクター吹き込み、唄 内田すえ

昭和37年4月5日 日本コロムビア吹込

(於：三島市公会堂) 唄 内田すえ

昭和42年 キングレコード 唄 相馬興華

全国で唄われる
農兵節



現在農兵節は、静岡県東部地域で地元の民謡として盆踊りなどに踊られています。

この他、愛媛県伊予三島太鼓祭り（写真・10月22日）の夜の太鼓台巡行の時に農兵節が唄われます。また、長野県池田町の夏祭りでも神輿の巡行の時に唄われています。いずれも、いつから唄われ始めたかははっきりしませんが、農兵節の祭りへの浸透ぶりが伺えます。

郷土館「ふるさと講座」 実施報告

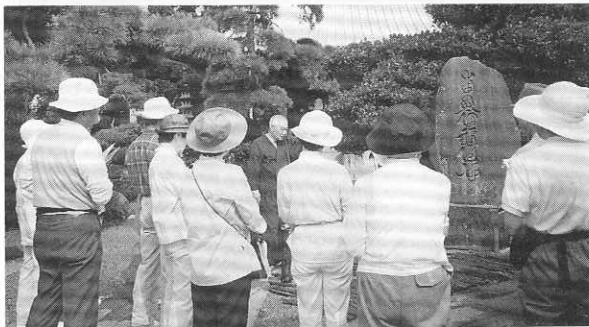
郷土館では三島市民を対象にテーマ別史跡めぐりと地域別コースの史跡めぐりを設け、各々の歴史的、民俗的特徴や自然（天然記念物）的な樹木・滝などを見たり文化財に触れて、三島という“ふるさと”全体の理解を深めてもらうため、「ふるさと講座—市内史跡めぐり」を実施しました。

〔第1回〕三島の石造物めぐり

平成8年9月27日（金） 講師：鈴木辰己氏

三島市内にある石造物のうち、唯念名号塔14カ所を探訪し、徳本碑との違いや、他の石造物—路傍の庚申塔・サイの神・馬頭観音像についても講師が説明してくれて、石造物にも歴史的・民俗的信仰のあったことを知り、多くの知的収穫を得たようでした。

楽寿園駅前口—蓮馨寺—林光寺—耳石神社……青木橋上—沢地—芝切地藏……昼食（山中城）—宗福寺—手無地藏—愛宕神社—田種寺—光明寺—真明院—持珠院—平田—楽寿園駅前口



〔第2回〕下田街道・中郷地区 史跡めぐり

平成8年10月4日（金） 講師：迫田信行氏

‘中郷’の地域名の由来（古代中の郷と佐波の郷を合わせた名称）や箱根西麓丘陵部と南部沖積平野から成り立つ地理についての説明から始め、「向山古墳群」～「覚応院塚」（旭家墓所）見学後さらにそこから北沢湿地の林まで歩きよい運動にもなった。バスで移動後「右内神社」の史跡や樹令500年のハリギリの大木などを見た。

現代史にも目を向けて、狩野川の旧河川流路のなごりの水がたまって池状になっている蛇行地形や石油化学コンビナート計画地であったことなどを解説され、受講者も感慨深げだった。

最後に「秋山富南墓所」と「在庁屋敷跡」を回り、「温水池」の水をながめ、清らかな気分で終ることができました。

楽寿園駅前口—向山小学校……向山古墳群……覚応院塚—葦山道—北沢湿地・亜鉛製錬工場跡—右内神社—長伏公園〈昼食〉—狩野川旧河川道（流路）・石油コンビナート計画地—真明宮……蔵六寺—秋山富南墓所—在庁屋敷跡・在庁道—温水池—楽寿園駅前口



〔第3回〕城あとと探訪

平成8年10月11日（金） 講師：半田 衛氏

テーマとして、現存の形状としてわかる（見える）城が残っているわけではないので難しかったが、講師の研究成果の話と受講者の想像力で補いながら探訪した。

中心は、「山中城」で主な復元城跡は全て見学した。城を守る武士と攻める武士軍団の戦闘など歴史上の事実と悲惨さ、天下統一の為に名を残した秀吉など興味ある話に皆満足した様子でした。

楽寿園駅前口—徳倉城址—河（川）原ヶ谷城址—谷田城址—梅縄城址—山中城址



〔第4回〕北上地区史跡めぐり

平成8年10月30日(水) 講師：津高重作氏

事前に見学許可を得て、説明を依頼していた龍澤寺と歛喜寺では、めったに入室できない部屋・場所にも案内していただき、名工・伊豆の長八の漆喰絵画等の作品をはじめ秀れた書・画を拝見できた。

又、佐野地域では、耕月寺・見目神社や瀧之本連水句碑、ふるさと人物説明板を読み快晴に恵まれたので富士山もよく見え、在宅されていた勝俣巖氏とも会えて、庭の柿(連水の連柿堂の名のもとになった)も見せてもらい、全4回にわたる「ふるさと講座—市内史跡めぐり」も、1人もケガをすることなく無事故で終了することができました。

楽寿園—青木橋・境川……耳石神社—佐野—勝俣家・瀧之本連水句碑……蓑毛の瀧—見目神社—耕月寺—(佐野小学校 休けい)—末広山—道祖神—駒形神社—龍沢寺—八幡神社—歛喜寺—道祖神—八乙女神社—楽寿園前



郷土教室 (第5回)

「風を作ってあげてみよう」終了報告

講師：竹細工玩具研究家 瀬川 到氏

講師から、ハサミを使うのでケガをしないように他人にもケガをさせないように注意して工作してほしい旨話があった後、風を作っていく順序を正しく、又上下・左右などのりづけする位置をまちがわないように説明をよく聞いて作業を進めてほしいとの話をされた。

風作りに使うじょうぶな紙を講師の説明されるとおりの長さに切り、のりづけして風の形になるようにするところから作業を始めた。

次に竹で作った風の骨を風の形をした紙に

ボンドでつけ乾いてとれなくなるのを確かめてから、風糸をつける工作にとりかかった。

風糸を骨(竹)に結びつけるのに皆苦労しているようだった。まず、6~7cmの間が頭骨と風紙とにできる位しならせて糸を張り、頭骨の両端に糸を結びつける。次に中骨をはさんで風の紙に上から $\frac{3}{4}$ の位置に穴をあけて糸を通し、三本の糸を束ねてバランスを考え、丁度よい交差する点に集まるかを確かめて風糸をしばりつけた。

一応風の形にできあがったので外に出てあげようとしたが、この日は風がほとんどなく、実際にあがるかどうかわからなかったが、一人一人自分で作った風を持って走り浮きあがらせようとするが、風が回転してしまったり、ななめに傾いてしまったりして、先生に修正してもらった後、各自帰宅した。

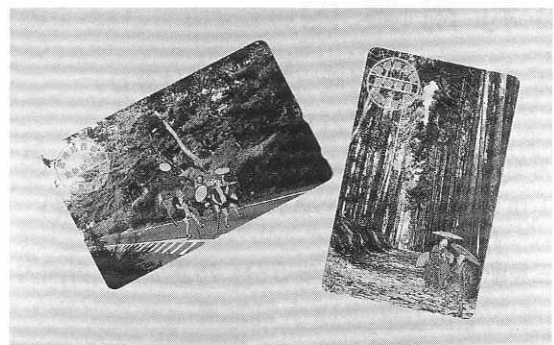


「箱根路西坂」テレフォンカード 販売のお知らせ

三島市郷土館では、「箱根路西坂」の石畳と松並木風景の2種類のテレフォンカードを作りました。

郷土館来館の記念やおみやげなどにご利用いただければ幸いです。

このテレフォンカードは、1枚800円(50度数)で販売しております。



平成9年度郷土館企画展予定のお知らせ

三島市郷土館では平成9年度の企画展示を下記の表のとおり計画しております。

多数の皆様のご来館をお待ちしております。

企画展示

テ ー マ	期 間 予 定	展 示 内 容
①企画展 「農兵節と平井源太郎」	平成9年3月16日 ～5月11日	三島を代表する、民謡「農兵節」のルーツを探り、平井源太郎の業績を検証する 農兵節（ノエ節）のルーツ、農兵の調練、農兵節と農兵踊りの変遷 (パンフレット作成)
③企画展 「巡礼－駿河霊場めぐり」	平成9年7月下旬 ～8月下旬	江戸時代の庶民の信仰心の現れの一つとして巡礼の旅があるがその中の駿河横道の紹介 駿河霊場の紹介 絵馬・巡礼供養塔他(パンフレット作成)
②企画展 「東海道－三島宿・沼津宿・吉原宿－」	平成9年10月下旬 ～平成10年1月中旬	県東部を代表する宿場(吉原・沼津・三島)の町並とその変遷や各宿場の特徴を紹介 各宿場の本陣の復元模型の展示・町並図・各特産品の紹介(パンフレット作成)
④企画展 「三島の成り立ちⅡ きたうえ村」	平成10年3月下旬 ～5月中旬	昭和9年に三島町と合併した北上村の歩みをたどる 北上地区の歴史・民俗・文化財・寺・神社等の紹介 (図録作成)

利用案内

休館日 毎週月曜(祝日の時は翌日)

12月27日～1月2日

開館時間 午前9時～午後5時00分(10/31まで)

入場無料 (但し、楽寿園入場の際、有料)

三島駅(南口)から徒歩5分。市立公園楽寿園内

郷土館だより No.57

平成9年3月15日発行

(年3回発行)

編集 三島市郷土館

住所 〒411 三島市一番町19-3 楽寿園内

TEL 0559-71-8228

FAX 0559-81-3730

発行 三島市教育委員会